対話を通して乳がんのない世界を

－妹島和世氏と考える「場の力」 多様な視点がひらく共創の可能性－



2026 年 11 月、東京で開催された YWBCH 2026（The 3rd International Conference on Young Women's Breast Cancer and Health）。若年女性の乳がんと健康をテーマに、世界 14 か国から医療者、研究者、若年乳がんの当事者・経験者、支援者などが集いました。

国際会議では、最新の研究成果や臨床課題について議論が交わされます。しかし、私たちは今回、少し異なる問いを投げかけました。

「乳がんと診断された若い女性がより健やかに生きられる社会を実現するために、本当に必要なものは何だろうか。」

その答えを探るため、建築家の妹島和世氏をお招きし、特別企画セッションを開催しました。妹島氏は、西沢立衛氏とのユニット SANAA として 2010 年プリツカー賞を受賞するなど、世界を代表する建築家の一人です。講演では「Architecture and Environment」というタイトルで、人と人との出会いや協働が生み出す空間づくりについてお話しいただきました。

続いて、「未来の共創」をテーマに、建築家の妹島和世氏、ELC ジャパン合同会社 職務執行者社長のジェームズ アクィリナ氏、東京都立駒込病院院長の戸井雅和氏によるパネルディスカッションを実施しました。モデレーターは、国立国際医療研究センター乳腺・腫瘍内科診療科長の清水千佳子氏が務めました。

医療だけでは解決できない課題がある

世界的に若い女性の乳がんは増加しています。また、乳がんと診断された当事者の多くは、治療だけでなく、仕事、妊娠・出産、育児、進学、キャリア形成、人間関係など、人生のさまざまな節目と向き合っています。

がんの治療成績の向上はもちろん重要です。しかし、それだけで当事者の人生が支えられるわけではありません。

当事者が安心して相談できること。
同じ経験を持つ仲間と出会えること。
医療者と患者が対話できること。
企業や地域社会が課題を理解していること。

こうした人と人とのつながりもまた、乳がんと診断された当事者の未来を支える大切な要素です。

私たちは、その「つながり」を生み出す力について考えたいと思いました。

そこで着目したのが、建築でした。



人が集まるだけでは、「場」は生まれない

世界的建築家である妹島和世氏は、「公園のような建築」というご自身のテーマを追求し、建築を通じて、人々の自然な出会いや対話を促す空間づくりに取り組んできました。

「公園のような建築」とは、誰かに指示されるわけではなく、人々が自由に集まり、それぞれの過ごし方を見つけ、思いがけない出会いや交流が生まれる場所。

その考え方は、日比野克彦氏による「明後日朝顔プロジェクト（2007）」が展開された金沢 21 世紀美術館や、「ロレックスラーニングセンターEPFL」などのプロジェクトにも反映されています。

そして、構想段階からの建築の完成までの建築家の人との出会い、そして建築が産み出されたあとそれを利用する人々の着想と創造が、建築家が想像をしていなかったような、建築の効果を産み出している

私たちは講演を聞きながら、あることに気づかされました。

それは、医療も「場」であり、YWBCH もまた「場」なのだということです。



YWBCH 2026 が目指したこと

YWBCH 2026 は、研究発表のためだけの学術集会ではありませんでした。

研究者が当事者と出会う。

医療者と支援者が当事者の目線で語り合う。

国や文化の異なる人々が、互いの経験に耳を傾ける。

そこから新しい研究テーマが生まれ、新たな支援の着想が生まれる。

そのような共創の場をつくりたい。

YWBCH2026 のテーマ

”Co-creating the Future with Science and Compassion”

には、科学を大切にしながらも、人と人との対話によって未来を創りたいという思いが込められていました。



異なる分野の対話から生まれるもの

講演後には、妹島和世氏、ジェームズ アクィリナ氏、戸井雅和氏によるパネルディスカッションが行われました。

建築、企業、医療。

一見すると異なる分野ですが、議論の中で繰り返し語られたのは、「人の声に耳を傾けること」の大切さでした。

優れた建築も、優れた医療も、一人の力だけでは生まれません。

多様な人々が関わり、それぞれの視点を持ち寄ることで、新しい価値が生まれます。

その意味で、今回のセッションは建築について学ぶ場であると同時に、患者支援の未来について考える場となりました。





「場」の力を、未来へ

この特別セッションは、乳がん研究支援を長年続けてこられた ELC ジャパン合同会社との協働によって実現しました。

異なる立場の人々が出会い、学び合い、新しい可能性を見つける。

今回の特別セッションは、対話の価値をあらためて示してくれたように思います。

若年乳がんの課題を解決するために必要なのは、医療の進歩だけではありません。

人と人がつながること。

対話が生まれること。

そして、誰もが参加できる「場」があること。

JBCRG はこれからも、研究の推進とともに、多様な人々が出会い、共に未来を創るための「場」を育んでいきたいと考えています。



※本記事は、YWBCH 2026 特別企画セッションにおいて、妹島和世氏をお迎えして開催した講演およびパネルディスカッションの内容をもとに構成しています。本企画は、ELC ジャパン合同会社の特別協賛により実現しました。
ELC ジャパン合同会社は、「乳がんのない世界を目指して（Breast Cancer Campaign）」活動を推進するエスティ ローダー カンパニーズの日本法人です。乳がんは医療だけでなく、企業や地域社会を含めた社会全体で向き合うべき課題です。本企画では、医療、企業、建築という異なる分野の対話を通じて、人と人をつなぐ「場」の持つ力と、新たな連携の可能性について考えました。
本企画は、異なる分野の対話から新たな価値が生まれることを示す機会となりました。
JBCRG は今後も、医療の枠を超えた多様な連携を通じて、若年乳がん患者とその家族に寄り添う社会の実現を目指してまいります。